



美術学校で勉強したこともなく、サラリマン時代から自己流で、エンピツから水彩、水彩から油彩と、材料は変わっても一貫して洋画だったが、五十歳過ぎで始めて、東アジアの最果ての小さな島国で、しかも自己流の「洋画」など、本場の人から見たら噴飯物ではないかと、ずっと思っていた。そんな老画学生にとって、もしかしたら洋画の本場でのミニ留学になる、のではないかと期待感をこめての参加だった。

この日も午後といつても三時からだが、会場当番に当たっていて、午前中は自由に取材ができる。

展覧会が始まってから、はや一週間が過ぎた。その間会場にいるときは、観客のそばへ行つて「スピーク イングリッシュ？」と話しかけ、下手な英語で「この作品についてどう思うか？」と、片端から質問した。それに対する回答の大方は、「これはプロの絵だ」「モダン」「構図に工夫がある」などで、総じて「オードソックスだが、モダン」というものだった。これはその昔、アートの真髄は「不易(変わらない)と流行(移りゆく)」であるとして喝破した、俳聖松尾芭蕉を勝手に私淑している身には、我が意を得たりだった。貧乏絵描きが身の程を過ぎた旅をしたが、大きな成果が得られたと、手応えを感じていた。

昨日と違っていい天気で、朝日を浴びた古城の街は、まるで別の表情をしている。マギオの噴水の背後のサンロレンソ大聖堂の入り

口に、巨大な石柱の影が落ちて美しい。それを手早く一枚描いてから、城門への大通りを歩いて、昨日目星を付けておいた、お目当ての旧いドアを描こうとしたが、歩道が狭すぎてダメ。城門も後ろへ下がれず、大きすぎて描けない。やむなく城門をくぐって狭い坂道を登り、元の噴水へ戻った。この噴水は、一、二七五年ごろに造られた。そのころの日本は元寇の役で、北条時宗の時代である。噴水下部の囲いの浮彫は、貴族から庶民に至るまでの、さまざまな人々の当時の暮らしが、白い石に彫つてある。

この街についてインターネットで調べてみると、「丘の上の旧市街には、粗石の建築物が中世そのままに残っている。遠くエトルリアの時代から今日までの長い時の流れが残ってきたものは多く、その不思議な魅力は訪れる人々の心に深くしみこむ。一二七五年頃に作られた大噴水(Fontana Maggiore)を中心に、13〜15世紀に建てられたゴシック期を代表するプリオリー宮、14〜15世紀の大聖堂など堂々とした建物が取り巻くペルージャ旧市街の中心広場。中世の面影が色濃く残り、当時の繁栄の足音が聞こえてくるようだ。

エトルリア。

ローマ文明の基礎となったのがエトルリア文明で、ローマがテヴェレ川に建国した頃、川岸の向こう側ではローマとは別の言語を話し、独特の宗教観を持ち、高度な芸術的センスを持った民族が住んでいた。それがエトルリア文明だ。エトルリア人は紀元前8世紀頃から2世紀にかけて、現在のローマからトスカーナ地方にかけて勢力を広げていった。ギリシア人と接触し、鉱業、製鉄、貴金属加工、陶器製造、土木建築、造船、農業などあらゆる部門で世界最高の技術を持つていたという。ローマの下水道、ポンペイの城壁を築いたのもエトルリア人だといわれている。文化芸術活動も盛んだった。エトルリア文明は、ギリシア文明をローマに引き継がせる重要な役目を担った。ローマはエトルリア文明を吸収するが、先住民族を歴史的に葬ってしまった。」とある。

緩い下り坂の「十一月四日広場」を見下ろすと、中世の街の喧騒や、エトルリア人の足音がよみがえってくるようだ。大聖堂の石段の中ほどに腰を下ろし、そこから見下ろす広場を、一気に描く。こちらに来て既に何枚もスケッチしているから、目の前の風景を理性ではなく、感覚というか感性、じかに心で捉える精神状態になつてゐる。つまり目で見て、理性で処理して、遠近法がどうか色彩がどうか、画面処理はこのようになど、考えて描くのではなく、いわば対象をじかに心という乾板に写し取る。…でも言った方がいいのだろうか、最近だんだんできるよになつてきた。こういう精神状態になると、あるときなど秩父札所で描いていたら、人に言えば笑われるだろうが、観光客が途切れてしんとしたときに、観音堂の奥から発する貴い波動のようなものを、感じ取ったこともあった。

絵を学ぶにつれて、事象を見える通りではなく、その向こう側、奥にあるものを描くことだと、思うようになった。絵は「よく観て描く」のではなく、「よく感じて描く」ことだと、勝手に独りで思っている。タブロー(制作)はアトリエでしかやらないから、現場で感じつつ取材するスケッチは、私にとつてとても重要だ。

無心で描いていると、耳に入る柔らかなイタリヤ語や、子供の叫び声、ざわめき、冬陽のぬくもり、高い鐘楼から落ちてくるもの錆びた鐘の音など、目の前の現実の風景や事象が、遠い遠い昔に既に経験したことがあるような、既視感というのだろうか。「俺はかつて、ここに立つたことがある」という、現実離れた不思議な感覚に襲われた。イタリヤは始めてなのだから、あり得ないことである。色を付けながら、「またここに来たい。ここで、描きたい」と、背筋に痺れるような感動を覚えて、強烈に思っていた。

(注) blog.goo.ne.jp/kitaj29/e/bd618abbdc68663ae1740ff060de559

小諸のスケッチ 小高峯夫

小諸なる古城のほたり 雲白く遊子かなしむ 緑なすはこべは萌えず 若草も藉くによしなし……と始まる島崎藤村自筆の詩碑がある。

ここは浅間山のほど近く、かつて北国街道の宿場町として栄え、歴史と文学に彩られた城下町、小諸市の懐古園である。

この広大な公園内の一角に小山敬三美術館があります。言わずと知れた小諸出身で文化勲章受章の小山敬三画伯を記念して建てられた美術館である。基は画伯自身が晩年手元に残った作品を小諸市に寄贈したいと申し出た事が建設の起りといわれる。

小山画伯の父親と藤村は旧知の間柄だったので、画伯がまだ駆け出しの頃芸術の道を志し、藤村のもとへフランス留学の相談に訪れた際、大いに激励し、又九年の留学を終え帰国後の滞欧作品展で作成した図録に、画業をたたえる序文を寄稿したりしている。

懐古園からほど近い高台に小諸高原美術館がある。ここで毎年秋季に小山敬三記念公募展が開催される。地元作家や全国の腕に覚えのある風景画家が競って応募する人気の公募展である。今年で27回展を迎え落選もあるとのこと、かなり高レベルの作品が並んでいる。埼玉西支部の高木さん、山口さんが入賞を果たしました。どちら



らも他に劣らぬ大作50号である。新日美の仲間の高いレベルが証明されました。この展覧会鑑賞と次回出品を期して取材にやってきましたというわけである。展示作品に力を得て、外へ出てみる